

## イオンワンパーセントクラブ「設立 30 周年記念式典」レポート

2019 年 11 月 2 日（土）、公益財団法人イオンワンパーセントクラブは設立 30 周年記念事業「Sustainable 2050 –持続可能な社会の実現 そのために私たちが出来ること–」の記念式典を TKP ガーデンシティ品川（東京都港区）のボールルームで開催しました。

当日は、ティーンエイジアンバサダー事業に参加した歴代アンバサダー 338 名が集結。日本、マレーシア、インドネシア、中国、オーストラリアなどアジア・オセアニアから 294 名、ブラジル、ペルーなど南米から 30 名、イギリス、ドイツ、イタリアなどヨーロッパから 14 名が参加しました。

第 1 部では有識者による基調講演、第 2 部ではグループディスカッションを実施し、SDGs への理解を深めるとともに、持続可能な社会の実現に向けた具体的なアクションについて議論しました。第 3 部では記念パーティーを開催。各国アンバサダーをはじめ、ゲストや関係者との交流を深めました。



第 1 部では基調講演として末吉竹二郎氏（国連環境計画・金融イニシアティブ特別顧問 /WWF ジャパン会長）、根本かおる氏（国際連合広報センター所長）が登壇したほか、計 6 名の歴代アンバサダーの代表が各国の課題と取り組みを紹介しました。

## 横尾博理事長による主催者挨拶

開会にあたり、イオンワンパーセントクラブの横尾博理事長が 30 周年記念式典の開催趣旨と活発な議論が行われることへの期待を述べ、開催を宣言しました。



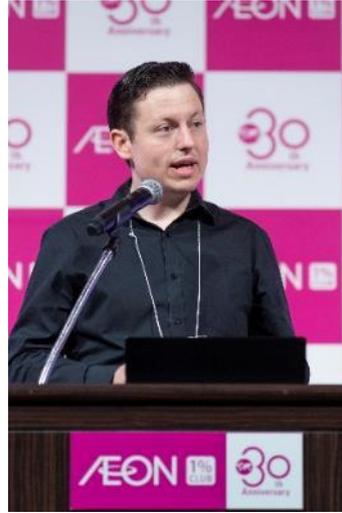
「ティーンエイジアンバサダー事業の設立から約 30 年を経て、皆さんがグローバルな立場で活躍されていることを大変嬉しく思います。」

「現在は地球環境の持続可能性や社会の分断が懸念される厳しい局面を迎えています。このテーマは国籍や産学官の枠を超えて一人ひとりが真正面から向き合うべき喫緊の課題だと認識しています。本日は社会の中心世代に成長された皆さんにお集まりいただき、かけがえのない地球を次の世代に引き継ぐためにできることを一緒に考えたいと思います。」

続いて、環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんが 2019 年 9 月の国連気候行動サミット 2019 で「もし裏切るなら私はあなたたちを許さない」と世界各国の大人たちへ強烈なメッセージを投げかけたビデオを放映。会の目的を改めて全員が感じ合い、プログラムがスタートしました。

## 歴代アンバサダースピーチ

最初に 3 名のアンバサダーが登場。マレーシア工科大学で建築コースの講師を務めているロシダ アブドゥル マジドさん（マレーシア／1990 年度アンバサダー）は「持続可能な建築」、オーストラリアの発電所で電気技師として働くカレン マイケルさん（オーストラリア／2006 年度アンバサダー）は「再生可能なエネルギー発電に関する取り組み」、ダノンアクアでミネラルウォーター事業に携わるプラディカ ファルハンさん（インドネシア／2011 年度アンバサダー）は「リサイクル可能な材料を使用したボトル入り飲料水の生産」をテーマに課題と取り組みについてスピーチしました。



左からロシダ アブドゥル マジドさん、カレン マイケルさん、プラディカ ファルハンさん

### 基調講演：末吉竹二郎氏

最初の基調講演では末吉竹二郎氏（国連環境計画・金融イニシアティブ特別顧問/WWF ジャパン会長）に登壇いただきました。アンバサダーのスピーチへの感想に続き、「持続可能な社会の実現 そのために私たちができる事」というテーマのもと SDGs の方向性と若い皆さんへのお願いについてお話しいただきました。



<末吉竹二郎氏の講演内容>

#### パリ協定と SDGs が世界の価値観を変えた

2015 年のパリ協定と SDGs をきっかけに世界の価値観が変わり始めました。パリ協定は「低炭素化」ではなく、CO<sub>2</sub> 排出をゼロにする「脱炭素化」を要求しました。CO<sub>2</sub> を減らすだけの国や地域、企業はゼロを目指すものに負ける時代が始まったのです。こうした中、車産業では EV が開発され、アメリカの Amazon は 2030 年までに 10 万台の EV を導入し、2040 年までのゼロエミッション達成を宣言しました。国連気候行動サミット 2019 の開催時点でも 77 カ国がゼロエミッションを宣言しています。

#### ゼロエミッションを実現する再生可能エネルギー

ゼロエミッションに大きな役割を果たすのが再生可能エネルギーです。現在、世界には太陽光発電と風力発電だけで 10 億 kW の電力を供給できる設備があります。これは日本全体の発電量の 4~5 倍であり、今や発電市場は再生可能エネルギーが主役になっていると言えます。そして「RE100」のようにビジネスに用いる電力を全て再生可能エネルギーで賄うことを目標とする企業も増え始めています。

## **サステナビリティを評価する会計基準が登場**

国連のSDGsの冊子の表紙には「Transforming our world（世界を変えよう）」と書いてあります。そのためには経済も循環型モデルに変革することが必要です。そうした中、サステナビリティを基準に企業を評価する新しい会計基準が生まれ、企業はサステナビリティに関する正しい情報開示を求められるようになりました。金融業界でもPRI（責任投資原則）が登場し、融資を受ける企業はSDGsとパリ協定に役に立つかをチェックされます。また、TCFD（気候変動関連財務情報開示タスクフォース）は気候変動のリスクを財務情報として捉えて企業を評価しています。

## **株主第一から社会第一主義へ**

かつてアメリカの大企業では株主への貢献が第一とされてきましたが、今年8月のビジネス・ラウンドテーブルにおいて、これからは社会への貢献を第一にするべきという価値観の大変革が示されました。企業カルチャーが変わり始めたのです。日本企業でもこれまでは国の考えに反する考えを示すことを避けてきましたが、何を目指すべきかを自ら決め、社会を理解しながら前進する文化が生まれています。

## **情報収集・議論・ベストチョイスが重要**

SDGsを取り巻く状況を理解いただいた上で、皆さんにお願いとアドバイスがあります。まずClimate Change（気候変動）はもはやClimate Crisis（気候危機）になっています。人類が地球を滅ぼしてしまうAnthropocene（人新世）は避けなければなりません。そのために重要なのは情報です。ゴールへのルートはいくつもありますが、ルートを探るためにはデータに基づいた議論が必要であり、その中でベストチョイスを取っていくことが重要です。

## **見えないものを見よう**

皆さんに意識していただきたいのは社会の様々な人への配慮です。自分のいる場所だけでなく、目に見えない違う場所や遠い将来までを想像していくことが重要です。アメリカの言葉に「地球は借り物である」というフレーズがありますが、借りたものはよりきれいに返すものです。そして次の世代でよりよい開発をできる余地を残して、世代間の公平も求めなければなりません。

## **「地球に代わりはありません」**

大事なのは自分で考えて行動し、自分で責任を取ることです。自由と規律の確立は民主主義の基盤をも作っていきます。サステナビリティに取り組むことは民主主義の基盤を作るといった気概をもって取り組んでいただくことを期待します。最後に、地球に代わりはありません。皆さんの手で地球を美しいものにして次の世代へ渡していきましょう。

## 質疑応答

イズマイル ハリム ファルキさん

(インドネシア/2011年度アンバサダー)

今後のSDGsはどのように動いていきますか。  
特にまだ化石燃料に頼っている貧困な国は  
SDGsのゴール13にどうアプローチすればい  
いでしょうか。



**末吉氏:** 途上国ではトランジションリスクを考える必要があるでしょう。今日の時点で価値があっても急激に価値を失っていくことがあり得ます。その上で途上国は先進国から支援を受ける場合「未来のエネルギーで支援してほしい」とニーズを転換していく必要があります。先進国も自然エネルギーへ投資をする方が良いと言えます。経済的な話をする、太陽光や風力発電の方がコストメリットがあります。これらのメリットをよく理解した上でゴールを実現する手段を作ることが大切です。

永井 敦さん

(日本/2015年度アンバサダー)

何年後にどのような状況であれば持続可能と言えますか。また、発展途上国にとって発展を我慢することは先進国からの押し付けになってしまうのではないのでしょうか。



**末吉氏:** 確かに我慢では何もできないでしょう。途上国も発展をやめることはできませんが、先進国のやり方を繰り返してはいけません。また途上国も消費をしているため、みんなで現在と将来の責任を取らなければいけません。捨てる経済から循環型の経済にすれば限られた資源をもう一度使うことができ、新たな豊かさを実現できます。持続可能とは新しい豊かさを実現することであり、どのような豊かさを求めていくのかを探し続けていきたいと思えます。

## 歴代アンバサダースピーチ

講演に続き、さらに 3 名のアンバサダーが登場。生物学者として環境衛生分野で活動しているロハス ロメロ マリソル ビクトリアさん（ペルー／1998 年度アンバサダー）は「安全で衛生的な飲料水管理」、塩野義製薬で新薬の研究開発を行う木村 迪子さん（日本／2008 年度アンバサダー）は「低価格の再生誘導医薬開発」、デンマーク難民評議会の一部であるレーダンスクに勤務するサンドラ ハウプトマンさん（ドイツ／2008 年度アンバサダー）は「再生可能なエネルギー発電に関する取り組み」をテーマにスピーチを行いました。



左からロハス ロメロ マリソル ビクトリアさん、木村 迪子さん、サンドラ ハウプトマンさん

## 基調講演：根本かおる氏

次いで、根本かおる氏（国際連合広報センター所長）に「SDGs を自分事化して世界を変革する担い手に～世界規模の思考力と足元の行動力を育むために～」をテーマに講演いただきました。冒頭では英語で歴代アンバサダーのスピーチへの感想を述べ、グローバルな集まりであることを印象付けました。



### <根本かおる氏の講演内容>

#### 国連広報センターは国連と日本の架け橋

国連広報センターは国連の活動を日本に伝えるとともに、日本における取り組みを海外に伝えています。成功例ではハローキティが国連とパートナーシップを結び、SDGs の伝道師として YouTube に動画をアップする活動をしています（ハローキティの動画を放映）。ま

た、事務所では学生インターンを受け入れて女性が活躍するロールモデルを示しています。難民キャンプなどでは女性だからこそできる支援に活かされており、SDGsの大前提である「誰も置き去りにしない」につながっています。

### **地球は人類共通の家**

2015年はSDGsとパリ協定がまとまった重要な節目の年でした。SDGsは「このままでは地球を次世代につなげない」という危機感から生まれたものです。これは宇宙飛行士たちの目線から地球を「人類共通の家」として捉えた動画で、人類共通の家を守るためにはみんなが力を合わせなくてはならないというメッセージが投げかけられています（国連広報センター「Home：家」を放映）。

### **罪のない国や人々が被害を受けている**

2018年3月に訪問したモルディブは、自国でCO<sub>2</sub>をほとんど排出していないにもかかわらず、他国のしわ寄せで高潮から逃れるための集団移住が始まっており、世代間や地域間のClimate Justice（気候正義）をどうするかが突き付けられています。また、世界人口の4割が水ストレスの中で暮らしており、いずれ7億人が強制移住を強いられると言われています。水や資源の対立は紛争を生み、紛争による難民は第二次世界大戦以降で最大の7000万人になっています。そして難民の多くは女性と子どもたちなのです。

### **行動し続けることで世界は変わる**

このような事態を是正するために生まれたのがSDGsです。SDGsは先進国も途上国も責任を負うことを定めています。SDGs採択のサミットでノーベル平和賞を史上最年少で受賞したマララ・ユスフザイさんは「誰も置き去りにしない」という言葉の責任を果たすよう訴えました（マララさんの動画を放映）。大切なのは問題を伝えて人を巻き込むこと、そして行動を続けること。それが大きなうねりとなってマララさんのように世界を変えられるのです。

### **ライフスタイルから見直そう**

末吉さんの講演で経済を変えるお話がありましたが、ぜひライフスタイルも変えていただきたいと思います。暮らしの中にはプラスチックや食糧、衣類の廃棄問題があります。これらはCO<sub>2</sub>排出量の多い産業ですから負荷の少ない形に変えなければいけません。服はファストファッションの流行により15年前に比べて6割多く買い、着用年数は半分になっています。日本の衣服消費における一人あたりのCO<sub>2</sub>排出量は世界最大です。私は事務所で着ない服を譲るclothing exchangeを行っています。皆さんにできることも沢山あるはずです。

## あなたの声を国連へ

2020年は国連設立75周年ですが、国連は若い人たちとコミュニケーションしたいと思っています（国連による動画『UN75 - the Biggest-Ever Global Conversation Towards the Future We Want』を放映）。動画のメッセージである“Let’s shape the future together”の“together”はゴール17のグローバルパートナーシップに関わる部分です。国連はあなたたちが思い描く未来や自分たちにできることを受け付けています。最後に、地球は未来の子どもたちからの借り物です。より美しくしてから返す運動にぜひ皆さんも携わってください。

## 質疑応答

### アリアン ジュニオ ウィナントさん

（インドネシア／2011年度アンバサダー）

人口過剰な現在、どのように持続可能性を達成すればいいのでしょうか。また、郊外ではどうやって基本的ニーズを満たせばいいのでしょうか。畜産や農業の環境影響は大きく、多くの途上国では水道水を飲めずにペットボトルの水を消費し、屋根のない家も多くあります。こうした状況で何を意識していけばいいのでしょうか。



**根本氏：**2050年には97億人に達すると言われるように人口は増えていますが、決して多すぎるということはありません。現在も世界中の人が栄養のある食事を摂れるだけの食料が生産されています。ただ分配の問題があります。また、2050年には世界の3分の2が都市へ流入すると言われていいますので、基本的なインフラ整備や水の確保に政府が注力する必要があります。農業も全ての工程でエネルギー消費の点検と削減を図るようなトータルな視点が必要だと思えます。

### レン サンサンさん

（中国／1998年度アンバサダー）

SDGsを進める上で、女性の観点から根本さんのようにリーダーシップを発揮するにはどうすればいいのでしょうか。



**根本氏：**答えはSDGsです。ゴール5（ジェンダー平等を実現しよう）は全てのゴールに関わる分野横断的な課題です。特定の分野を見るのではなく、女性に何ができるか、どのように扱われるべきか声を上げなければなりません。私は講演依頼が来たとき、登壇者や聴衆のジェンダーバランスが著しく欠けているときは断っています。そう伝えることで主催者の方が考え直してくれるのです。こうした個人のアクションが積み重なれば大きなうねりになっていきます。

### 三宅香執行役による閉会の挨拶

イオン株式会社執行役 環境・社会貢献・PR・IR 担当の三宅香がイオングループの理念と事業運営の考え方などを説明した後に、30年間のCSR活動やSDGsとの共通点を解説し、具体的な取り組みとして2018年に発表した「脱炭素ビジョン」と活動事例を紹介しました。最後に、今後も社会へ貢献する企業であり続けることを誓い、会を締めくくりました。





<第 2 部：グループディスカッション（13:30～16:30）>



第 2 部では SDGs の達成に向けてワールドカフェ形式のグループディスカッションプログラムを行いました。プログラムの目的は、歴代ティーンエイジアンバサダーの一人ひとりが取り組む具体的なアクションを議論し、全員の投票によって「未来行動宣言」を決定することです。

開始に先立ち、イオンワンパーセントクラブの奥田健太氏（統括マネージャー）が実施内容と進行について説明しました。



## 4つのゴールについて 40 チームでディスカッション

ディスカッションのテーマはSDGsの17のゴールのうち、ゴール3「すべての人に健康と福祉を」、ゴール4「質の高い教育をみんなに」、ゴール13「気候変動に具体的な対策を」、ゴール14「海の豊かさを守ろう」の4つです。

ゴール3をA、ゴール4をB、ゴール13をC、ゴール14をDの4グループに分け、それぞれのグループごとに10チーム（1チーム9名）、合計40チームを結成。各チームでゴール達成に向けた宣言（コンセプトと2つのアクションプラン）を決定して発表します。

国籍も性別も、年齢も異なり、さらにほとんどが初めて会うメンバーのため、まずは自己紹介からスタート。その後、チームごとにリーダー、サブリーダー、書記、時間管理役を各1名選出し、自由かつ活発なディスカッションが始まりました。

ディスカッションには谷淳也氏（Future Earthのグローバル事務局・日本ハブのシニアアドバイザー）も参加いただき、各テーブルを回り、多くのアンバサダーの質問にアドバイスをおくりました。



チームごとのディスカッションの様子

## リーダーディスカッション&サブリーダープレゼンテーション

各チームでの宣言が決定した後に、同じゴールについて議論した10チームのリーダーが協議し、各ゴールに対する1本の宣言をまとめました。

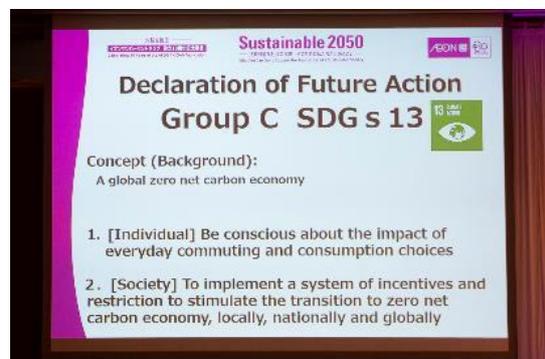
一方、サブリーダーは他のゴールについてディスカッションしたチームを訪問し合い、自分たちの宣言をプレゼンテーションしました。



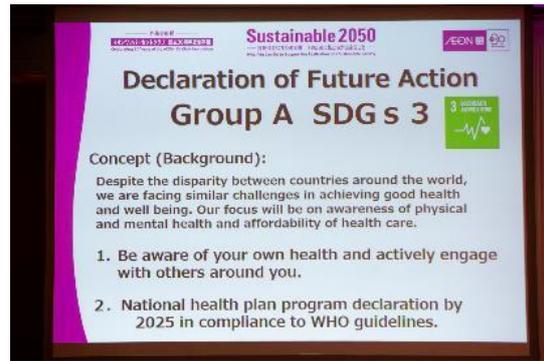
各チームリーダーによるグループごとのディスカッションの様子

## 代表によるプレゼンテーション

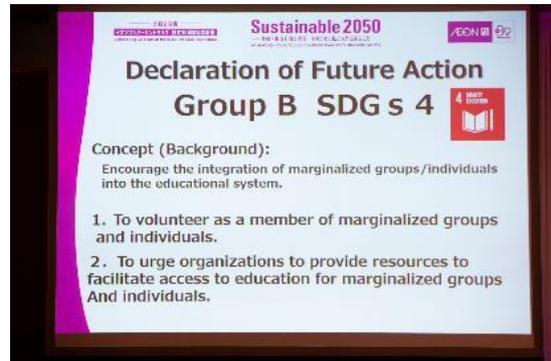
最後の投票に向けて、各リーダーから選ばれた代表4名がゴール達成に向けた宣言を力強くアピール。プレゼンテーションが終わると、同じゴールについてディスカッションしたチームから大きな歓声が上がり、会場は熱気に包まれました。



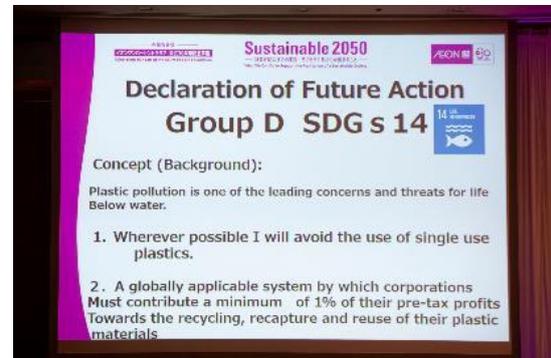
グループC代表のソアレス クラウドियो ダ シルバ マウリシオさん（ブラジル/1995年度アンバサダー）と宣言内容



グループ A 代表のカレン マイケルさん（オーストラリア／2006 年度アンバサダー）と宣言内容



グループ B 代表の阿部 耀（ヒカル）さん（日本／2015 年度アンバサダー）と宣言内容



グループ D 代表のハーディ ブレント ネイサンさん（オーストラリア／1997 年度アンバサダー）と宣言内容

### 「未来行動宣言」を決定

最後にアンバサダー全員による投票が行われ、ゴール 14「海の豊かさを守ろう」のプレゼンテーションが 1 位を獲得。同ゴールについてディスカッションした 10 チームが話し合い、オーストラリアの HARDY BRENT NATHAN さん（1997 年度アンバサダー）と日本の高田実佳さん（2015 年度アンバサダー）が 3 部の記念パーティーで「未来行動宣言」を表明する代表に選ばれました。



投票するアンバサダーの皆さん（左）と結果発表

## アンバサダーの感想

第1回アンバサダーで最年長のIDA AZERIN RAZALIさん（47歳／マレーシア）は「色々な国の人と様々な視点から話し合えたのでとても有意義な時間だった。私はサステナビリティロゴを商品につけることを提案した。そうすれば消費者は買うものを選ぶし、企業もサステナビリティに貢献していることをアピールできると思う」と話しました。

また、2017年度アンバサダーで最年少のエンドウ ハルカさん（17歳／日本）は「始まる前はものすごく緊張したけど、SDGsについて世代の違う様々な国の人と話せたので来て良かった。また参加したい」と述べました。



### <第3部：記念パーティー（18:30～20:30）>

第3部では会食と歓談を目的に記念パーティーを開催しました。

パーティーには若宮健嗣外務副大臣、逢沢一郎衆議院議員、ファドリ アディラ駐日マレーシア次席大使をはじめ、政府関係者や各国大使館の方々、イオンワンパーセントクラブの活動にご協力いただいている由紀さおり・安田祥子姉妹などをゲストにお招きしました。

また、イオングループからは岡田卓也名誉会長、岡田元也取締役兼代表執行役社長も参列し、歴代ティーンエイジアンバサダーを含め、総勢約450名が参加しました。

#### **アンバサダー代表が4つの「未来行動宣言」を表明**

会の冒頭ではオーストラリアのハーディ ブレント ネイサンさん（1997年度アンバサダー）と日本の高田実佳さん（2015年度アンバサダー）がアンバサダー代表として登壇。第2部のディスカッションプログラムで決定した「未来行動宣言」を若宮健嗣外務副大臣に表明しました。

#### <4つの未来行動宣言>

1. 2025年までにWHOのガイドラインに従って、国民健康計画宣言をする。
2. 社会から取り残された人々に教育の機会を提供するように国際機関に要求する。
3. ローカル、国、地球レベルで脱炭素社会を促進する仕組みづくりをする。
4. 企業が少なくとも利益の1%をプラスチックの再利用やリサイクルに向けて使う世界共通の仕組みづくりを行う。



若宮健嗣外務副大臣（右）と「未来行動宣言」を表明する高田実佳さん（中央）、ハーディ プレント ネイサンさん

### 若宮健嗣外務副大臣ご挨拶「未来行動宣言を受けて」

「未来行動宣言」の提言書を贈呈された若宮副大臣は、宣言への感想やアンバサダーの皆さんおよびイオンワンパーセントクラブへの今後の期待を述べられました。



「国籍も年齢も異なる皆さんが策定した行動宣言は非常に力強く、素晴らしいものだと感じました。SDGs 達成に向けて国連が活動を加速化する中、宣言に基づいた具体的なアクションを起こしていただきたいと思います。」

「日本政府も SDGs 達成の柱のひとつに次世代の方々や女性のエンパワーメントを掲げており、各国の高校生が交流を深めるティーンエイジアンバサダー活動は SDGs の達成に大きく貢献すると思っています。ぜひこの事業を今後も継続していただけることを願っています。」

「会場に足を踏み入れた時、皆さんのパワーに感動し充実した一日を過ごせたのだと直感しました。日本政府もこの宣言をしっかりと受け止めてやっていきます。皆さんにも自分の国や仕事場で今日得たものを発揮していただけることを期待しています。」

### 横尾博理事長ご挨拶

主催の挨拶に立った横尾博イオンワンパーセントクラブ理事長は、財団設立の経緯やアンバサダー事業の成果などを説明し、財団の活動をさらに推進していくことを約束しました。



「イオンワンパーセントクラブは 1989 年に設立しました。翌 1990 年 11 月にマレーシアから 28 名を招き、日本の高校生と環境学習を通じて交流を深めたのがティーンアンバサダー事業の始まりであり、当財団として最も歴史ある活動です。以来、毎年行っており、参加した国は 18 カ国、参加者は 2,810 名にのぼります。」

「参加者の最年長は現在 47 歳で、多くの方が現役世代の中心として活躍しています。今回の集まりがかけがえのない地球を次世代に引き継ぐという未来への共通の責任を果たす糧となることを期待しています。」

「当財団も次世代を担う青少年の健全な育成という事業規定に沿って更なる発展と継続をお約束します。」

### **アンバサダーから岡田名誉会長へ感謝の手紙**

イオンワンパーセントクラブの創設者である岡田卓也名誉会長に対し、18 カ国の歴代アンバサダーを代表し、日本の山川綾菜さん（2016 年アンバサダー）から感謝の手紙が読まれました。また、他の 17 カ国の代表から感謝の言葉を書いた寄せ書きが贈られました。

#### ＜山川綾菜さん感謝の手紙＞

「2016 年のベトナム訪問は異なる文化に触れるとても貴重な機会となりました。文化の違いはとても面白く、尊重すべきものだと感じました。この経験から世界中の多様な人々と共に働きたい気持ちが高まり、将来は国際機関で働きたいと思っています。」

「2 年前と一緒にベトナムの平和記念館で植樹させていただいた桜の木は、2 年で花が咲き、ますます成長しているそうです。岡田会長と関係者の皆さんに深く感謝するとともに、この経験とつながりを大切に、持続可能なより良い社会の担い手になっていきます。」



岡田卓也名誉会長（中央右）と山川綾菜さん（中央左）。  
後列は各国の歴代アンバサダー代表の皆さん

## 駐日マレーシア次席大使からの祝辞

来賓のご紹介に続き、ティーンアンバサダー事業の記念すべき第 1 回目となったマレーシアのファドリ アディラ駐日マレーシア次席大使よりお祝いの言葉をいただきました。



「設立 30 周年、誠におめでとうございます。イオンワンパーセントクラブの活動は設立以来、社会の持続可能性に貢献する重要な役割を果たしてきました。ひとつは次世代の健全の育成、そして様々な国との友好関係の強化です。特にティーンアンバサダー事業はこうした活動に大きく貢献していると思います。」

「私自身、マレーシアと日本の友好関係と相互理解が深まっていると実感しています。これまでの多大な努力について深く感謝するとともに、今後も多くの国で若者の育成にご尽力いただくことを期待しています。」

## 逢沢一郎衆議院議員による乾杯のご発声

乾杯のご発声は日本・ミャンマー友好議員連盟会長、日本・タイ友好議員連盟副会長、日本・ベトナム友好議員連盟を務める逢沢一郎衆議院議員よりいただきました。

「アンバサダーの皆さんを拝見しますと、立派に成長されており、素晴らしい 30 年であったのだと嬉しく思います。アンバサダー事業のますますの発展と、イオンワンパーセントクラブがアジアの、そして世界の平和に大きく貢献し、すべての人々が人間らしい生活を過ごせるようになることを願って、乾杯！」



その後、会食と歓談がスタート。アンバサダーたちはビュッフェ形式の食事を楽しむとともに、ゲストや関係者、他国のアンバサダーと積極的に歓談し、楽しく充実した時間を過ごしました。



会食と歓談を楽しむ参加者

### 全員で「We Are The World」を熱唱

歓談と会食を楽しむ中、歴代アンバサダーが登場するインタビュー映像を放映しました。アンバサダーとして他国を訪問した当時の映像が流れるとアンバサダー達からは笑いや歓声が起こりました。



インタビュー映像（左）と盛り上がるアンバサダーの皆さん

続いて、アフリカの飢餓と貧困を解消する目的で1985年に制作された「We Are The World」を全員で歌いました。歌声は徐々に大きくなり、写真を撮ったり、共に肩を組んで体を揺らしたり、心がひとつになることを実感する大熱唱となりました。



「We Are The World」を熱唱するアンバサダーの皆さん

最後に参加者全員による記念撮影が行われ、設立 30 周年記念事業は幕を閉じました。

